

---

## 特 別 講 演

---

核医学近畿地方会 30回のあゆみ

京都大学名誉教授 鳥 塚 莊 爾

昭和43年6月、京都大学医学部放射線医学講座、同附属病院放射線部長の福田正教授の提案により「放射性同位元素の診断、治療への応用ならびに生体に及ぼす影響の研究の進歩をはかり、近畿地方における研究者の連絡と協力および研鑽をはかること」を目的として、近畿核医学研究会発足の発起人会が開催され、会則が作成され、近畿核医学研究会が発足した。同年9月21日、福田教授を会長として第1回の研究会が開催され、以後この形式で10年間行われた。昭和53年、第11回研究会開催時に第12回(昭和54年)より日本核医学会近畿地方会として行われることになり、会則の改定などが行われた。

地方会は年1回開催され、第1回～第29回までの出席者数と演題数はほぼ平行しており、最近数年間における出席者数は約200名、演題数は約50題で推

移している。

演題を *in vitro* 検査、機器・放薬他、循環・代謝検査、シンチグラフィの4分野に分けての推移では、当初は循環・代謝検査が多かったが、第13回(昭和55年)頃より循環・代謝検査は減少し、シンチグラフィの演題数が増加し、最近10年間の演題の90%あるいはそれ以上がシンチグラフィの演題になっている。

*in vivo* 検査の臓器別の演題の推移では、最初の10年間は甲状腺、肺臓、肝臓の演題が多かったが、以後漸減し、かわって骨、腫瘍、心臓、脳の演題が増加し、ことに心臓の演題が多くなっている。

以上の経過において、近畿地区の核医学の研究、診療は着実に発展していると考えられる。また核医学診療は Prognosis, Patient care, Prevention の3Pに大きく貢献し、医療費の軽減に大きく貢献することが期待され、これらの実現に努力しなければならないと考える。

---

## 一 般 演 題

---

1. 正常海馬における  $^{99m}\text{Tc}$  脳血流製剤と PET による脳循環代謝量との比較

奥 直彦	植原 敏勇	清家裕次郎
		(阪大・放部)
橋川 一雄	森脇 博	山本 晴子
松本 昌泰		(同・一内)
西村 洋		(同・耳)
西村 恒彦		(同・トレーサ)

脳血流 SPECT 用トレーサである  $^{99m}\text{Tc}$ -HMPAO および  $^{99m}\text{Tc}$ -ECD はそれぞれ多少異なる性質をもつていて、健常者における両トレーサの分布の差異については十分に論議されていない。この研究では健常

脳における  $^{99m}\text{Tc}$ -HMPAO および  $^{99m}\text{Tc}$ -ECD の集積の差異について検討し、さらにその原因を考察する目的で PET により測定した健常者の局所脳血流量(rCBF)ならびに局所ブドウ糖代謝分布と比較したので報告する。対象は健常ボランティア延べ20名で平均年齢は24歳であった。20名のうち8名は  $^{99m}\text{Tc}$ -HMPAO と  $^{99m}\text{Tc}$ -ECD の両者を異なる日に投与され、SPECT を撮影した。6名は PET による rCBF 測定を行い、残り6名は局所ブドウ糖代謝分布を求めた。使用した SPECT 装置は日立メディコ社製4検出器回転型ガンマカメラ、PET 装置は島津社製 SET-2400W である。 $^{99m}\text{Tc}$ -HMPAO および  $^{99m}\text{Tc}$ -ECD はそれぞれ 740 MBq を静注し、その10分後より高分解能コリメータにて撮影した。PET による rCBF 測定は  $^{15}\text{O}$ -